

アラスカ・ハンター北壁登攀と凍傷受傷

吉 田 一 貴

猪 熊 隆 之 (兼監修)

初めに

大学で山を始めた私は登山にすっかり熱中し、中央大学山岳部で現役4年間を終えたあとも、自分なりに山を続けてきた。特にアルパインクライミングに心惹かれ、世界の困難な壁を登ることを夢見て日本で経験を積み重ねた。そのうちに憧れていた壁を登攀対象として現実的に見られるようになり、いよいよ実際に海外の壁に挑戦したいと思うようになった。なかでもアラスカは憧れの山域だった。特にハンター北壁はその見た目と難易度から惹きつけられるものがあつた。セスナを降りて2時間もかからずに取り付けると言う短いアプローチも魅力的だ。

私は日本山岳会学生部の後輩で東海大山岳部OBの西田をアラスカに誘つた。2人で計画していたが、

私の同期で早稲田大学山岳部OBである鈴木雄大も参加することになった。

偵察と二度の敗退

2022年4月23日に入山し、翌24日に偵察をおこなつた。見た感じ、氷はそこそこ繋がつていて登れそうに見えたので、当初の予定通り、まずはこの壁の初登ルートである「ムーンフラワーバットレス」にトライすることを決めた。25日に早速、登攀開始。しかし、このときはスピードが上がらず、ビバーク予定地までたどり着くことができずに早々と下山した。

休養日を挟んで4月29日から2回目のアタックに出る。前回よりはかなりスピードが上がって順調に

高度を上げた。9ピッチ目の「ブラウ」という難しいコーナークラック(M6~7)を越えて、そこまでは順調に進んでいたが、10ピッチ目以降の、本来易しいはずの氷のガリーに氷がなくて微妙なクライミングを強いられ、登攀に時間がかかってしまう。さらに、この日2つ目の核心となる14ピッチ目の「タマラトラバース」は、悪いトラバースが40m近く続く恐ろしいピッチで、ここでも時間がかかってしまう。残り3ピッチでビバーク



写真1 ハンター北壁「ムーンフラワーバットレス」の登攀ルート(黒い実線)

3. 海外登山記録

ク予定地に着くはずだが、ここまででかなり消耗してしまっただけで、このピッチの終了後、ビバークを決定する。氷を削ったものの一畳くらいの狭いスペースしか確保できず、座位での厳しいビバークを強いられた。一晩過ごして身も心もすり減った僕らは、翌日、少し登ってから敗退を決めた。

思いのほか、氷が少なくて厳しいコンディションだったので、3回目のトライを敢行するかどうかベースキャンプで話し合った。ルートを変えろと言う選択肢もあったがやはり諦めきれず、もう一度トライすることにした。

三度目の正直

5月5日。3回目の挑戦になるので下部はさすがに順調に進み、「プラウ」の下に11:30着とかなり良いペースで進む。前回、フリーで突破した「プラウ」も今回はフリーにこだわらずにエイドを交えて進む。前回、敗退の原因となった氷のセクションと「タマラトラバース」は相変わらず悪いが、前回よりはかなりスムーズに越える。余裕を持ってビバーク予定地の第一バンドまで到達出来ると踏んでいたが、なんだかんだで22時を過ぎてしまう。それでもここまで来た安心感で気持ちは軽かった。氷を削り出したテラスに690gの軽量テントを張って中に潜り



写真2 下部の登攀

込むと、信じられないくらい暖かく、思わず声が出た。このことだけでこの登攀の成功が約束されたような気持ちだった。決して広いとは言えないが、前回のビバークに比べれば快適そのものだ。横になるころには前日に起床してから25時間が経過していた。

5月6日。第一バンドからやさしい2ピッチをこなした後、「シャフト」と名付けられた垂直の氷のセクションが130m続く。そこを抜けると第二バンド。その後はエイドが1ピッチ出てくる以外は第三バンドまで易しい氷が続く。残りのピッチ数から考えても今日は第三バンドまで行きたい。

寝たのが遅かったので出発が遅くなってしまい、10時半にスタート。ルートファインディングとロープの流れに苦勞しながらも、なんとか「シャフト」の入口へ到達。氷があるかどうか心配した「シャフト」はなんとか繋がっているように見える。このピッチは吉田がリード。出だしの垂直部をリズム良く越えようと、氷を順調に登れたが、抜け口のハング部分に氷がなくて行き詰まってしまう。アックスをひっかける手がかりもなく、プロテクションも悪い。エイドできるような弱点もなく、散々粘った挙句、鈴木とリードを交代する。正直、このときは敗退だと思った。

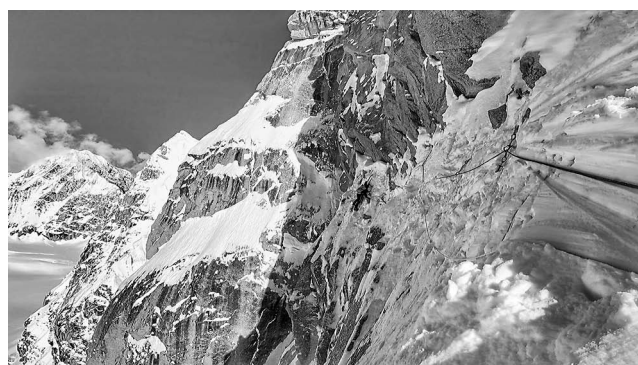


写真3 高度感のあるトラバース

しかし、鈴木は少しラインを変えて際どいエイドで何とかこの20ピッチ目を突破。結局、このピッチ

だけで3時間40分を費やしてしまった。このピッチでのタイムロスが響き、この日は第二バンドまでしか進めず。もっと進みたかったが、時間も遅かったので、ここでビバークすることにした。雪の小尾根を削ると昨日よりも良いテラスを作り出すことができた。



写真4 ビバーク中の食事

5月7日。この日は最小限の荷物でバットレスの頭を目指す。食料は7日の夜の分までしかない。それ以降はスープと予備食として持参した、行動食1日分のみ。今、ここにいる時点で下山が明日になることは間違いないが、それでもいけるところまで行こうと思う。アルパインクライマーがこの壁で頑張らずして、いつ頑張るといふのか。

疲れはあるものの、前半はまずまずのスピードで進んだ。懸案の26ピッチ目のエイドセクションは鈴木がスムーズに突破してくれた。その後はひたすらに易しい氷が続いた。易しいとはいえ全体的に氷が硬くてスピードは意外と上がらず、腕とふくらはぎがどんどん重たくなってゆく。ようやくたどり着いた核心のひとつを鈴木が最後の力を振り絞るように渾身のクライミングで突破し、最後の冰雪壁に飛び出した。実質のクライミングはここで終了だが、バットレスの頭まではまだ2~300mほど易しい冰雪壁が続いている。既に時刻は22時。この先も登り続けたかったが、食料のことを考えるとこれ以上登ること

は厳しいだろう。タイムアップでここが我々の終了点となった。



写真5 最高到達地点にて

ここまで登って降りるパーティーもいるようだが、完登というにはちょっと中途半端であることは否めない。しかし僕らは、この条件下で全力を尽くしてここまで来られたことにとっても満足していた。この時の充実感は、言葉にできないほど素晴らしいものだった。太陽があまり当たらない北壁に西陽が差し込んでいて、アラスカの刺すような冷たい空気がほんの少し和らいだような気がした。

まだまだ長い下降が残っていて、そう長く感慨に浸ってられるわけもなく、僕らはそそくさと下降を始めた。降り始めてすぐに暗くなって、ヘッドライトをつけた。そのうち雪がちらつき始め、その雪は段々と激しくなった。すべての衣類を着込んだにも関わらず、ずっと寒さで震えていた。凍った環付カラビナと悴む指先のせいで下降は捗らず、パートナーたちを待つ時間は永遠に感じられた。夜通し下降を続け、ようやく第二バンドのデポ地点に着いたのは翌朝の4時。あたりはすっかり明るくなっていた。

5月8日。下降を続けるには疲れ過ぎていて、一昨日に削った第2バンドのテラスにテントを張って休むことにした。お湯を沸かしレーションをかじっ

3. 海外登山記録

た後、少しだけ眠った。2時間弱の仮眠の後、下降を再開する。雪は一時止んで、日差しが出て少し穏やかな雰囲気だった。細かいミスやトラブルは有つつも無事に降り切ることができた。ユマーリングを繰り返したロープはダメージが大きく擦り切れそうだったので最後の方は怖い思いをした。下降が終了したときは、終了点でのさまざまな感情はとうに吹き飛んでいて、生きているという安堵感でいっぱいだった。視界の無くなった氷河のトレースを頼りに歩いて何とかベースに帰ることができた。

片付けもそこそこに食事にありつく。疲労で忘れていた食欲が肉を焼く匂いと視覚に刺激されて蘇り、食べるように食べた。腹を満たすと鉛のような体を引きずって何とかシュラフに潜り込み、翌日の昼まで眠りこけた。(ここまで文責吉田、監修猪熊)

凍傷の受傷

この登攀では、吉田が凍傷を負った。受傷の経過とその後の処置について、ここに記させていただく。

本人によれば、登攀中は全く凍傷に気づかなかった。3回目のトライではハンギングビレイのとき、足の指に違和感を感じていたが、それは氷が固かったので、強く蹴り込むことが多く、その痛みだと思っていた。ベースキャンプに戻ったとき、明らかに痛



写真6 ベースキャンプでの凍傷の状態

みがあった。そのときは、疲れ切っていたため、その場では靴下を脱いで確認することをせずに、寝てしまった。翌朝、尿意を感じて起きると、歩けない程の痛みになっていた。そこで確認すると、右足の親指と小指が黒ずんでいた(写真6)。凍傷になっていることが分かったので、プラティパスに40度前後に温めたお湯を入れて湯たんぼ代わりにし、それで指を保温するとともに、お湯を沢山飲んで水分の摂取に努めた。

最初は、日本に帰国した後、中央大学山岳部時代にお世話になった、杉田クリニック(横浜市)に受診しようと思ったが、タルキートナの宿で吉田の足を心配したオランダ人から経口鎮痛剤のイブプロフェンをいただいた。さらに、吉田の先輩でもあり、国立登山研修所アドバイザーの渡邊雄二氏の友人で、パートナーの鈴木がお世話になったことがある、国際山岳医の大城和恵先生に電話してアドバイスをいただいた。先生の指示に従って、イブプロフェンを服用するとともに、アンカレッジにいる医師を紹介していただき、受診することができた。アンカレッジでは潰れた水泡の処置をしていただき、死んだ組織を切り取って洗浄する。感染症予防の薬、ゲーベンクリームを塗る。医師からは、1日2回洗浄してゲーベンクリームを塗るように言われる。

帰国後、杉田クリニックを受診し、基本的に同じ



写真7 水泡ができた受傷部位

処置を続ける。その結果、幸いにして2022年12月現在、受傷部位はほぼ回復しており、今後もクライミングを続けていく予定である。

反省点

凍傷を負ったときの応急手当は、受傷後なるべく早い時間におこなうことが重要である。そのことから、どんなに疲労していても、ベースキャンプに戻ったとき、すぐに受傷部を確認して保温措置を取るべきであった。今回は、ベースキャンプからはほとんど歩くことなく、セスナでタルキートナへ戻ることができる。そのため、解凍をしても再凍結の可能性が低いことから、なるべく早く解凍及び、保温の処置を取るべきであった。また、今回は、ピバーク中に狭い空間の中で、インナーを脱いで足の指を確認することが難しかったが、可能な限り、毎晩、足の指を確認すべきであったと思う。

評価できる点

凍傷が発覚してからの応急手当が適切であったことから、深い凍傷を負ったにも関わらず、指の切断など大きな障害には至らなかった。それには、日本から適切なアドバイスを送っていただき、アンカレッジの医師を紹介していただいた大城先生のお力によるものが大きいと思っている。極地や高所のクライミングでは、設備の整った医療機関に運ばれるまで時間がかかることから、それまでに適切な応急処置をおこなうことが極めて重要になる。その際に、医師のアドバイスを受けられることは、大きな安心にもつながるし、後遺障

害のリスクを減らすという点でも大きい。事前に、知り合いの医師に登山やクライミングに行くことを伝え、万が一のことが起きたときに連絡が可能なかを確認しておくといいだろう。

極地や高所での長期間のクライミングは、長時間、低温、低酸素などの過酷な条件に晒される。そのため、凍傷のリスクも大きくなると思われるが、凍傷は受傷後、速やかに適切な応急処置を取ることが非常に重要で、その後の経過に大きな影響を与えることから、この経験が今後、怪我をしたクライマーにとって役立つものになることを願っている。

最後に、大城和恵先生には大変お世話になった。この場を借りて心よりお礼申し上げたい。

登攀時のハンター周辺の気象

1回目と2回目のチャレンジをおこなった期間前

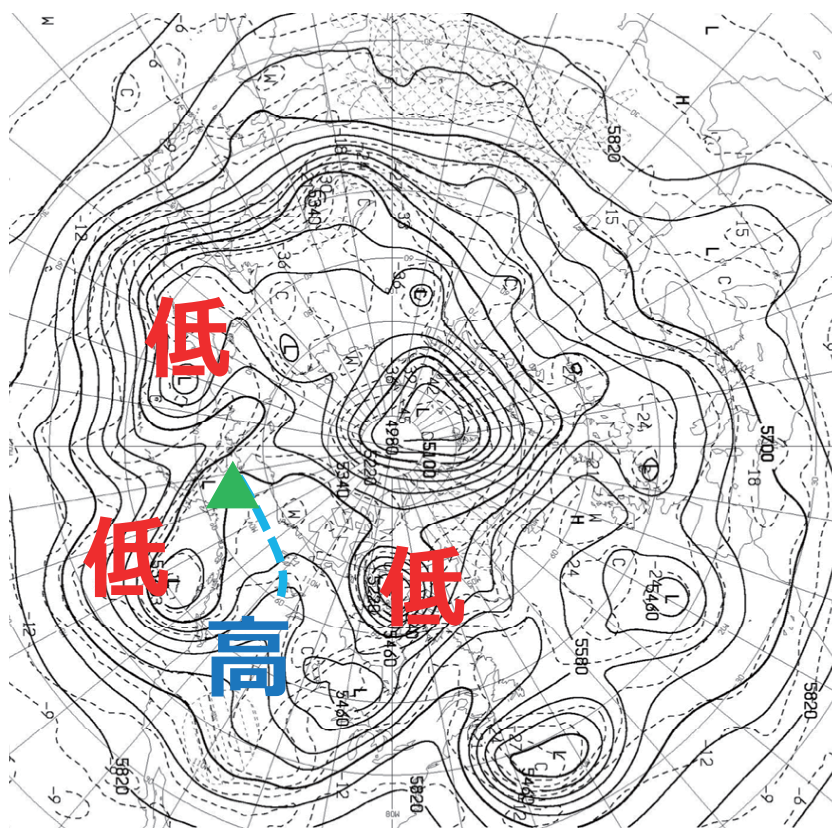


図1 2022年4月25日アラスカ時間午前3時 500hPa面北半球高度・気温解析図

半（4月25日～30日）は、カナダのノースウエスト準州付近にある、上層のブロッキング（停滞性）高気圧がアラスカ方面に張り出し、この影響で気温が高く、好天が続いた。

期間の中盤は、アラスカ南西側から上層に寒気を伴った低気圧がゆっくり近づいてくるが、まだ気圧の尾根上に入り続けていた（図2）。

3回目の登攀をおこなった期間後半になると、アラスカ周辺は小さな低気圧に囲まれて、上層に寒気が入り、大気が不安定になっていく（図3）。

下降した日は天気が崩れ、チリ雪崩が発生したそうだが、500hPa面の天気図を見ると、5月6日にアラスカを覆っていた寒気が抜けつつあり、前線帯に入ってきていることが分かった。

今回は、期間前半と後半とで天候が大きく変わり、幸いにして天候の崩れは下降日から始まった。近年、地球温暖化の進行とともに、極地においても寒帯前線ジェット気流の蛇行が大きくなる傾向にあり、この流れに取り残されて上層のブロッキング高気圧や低気圧が発生しやすくなっている。したがって、上層の高気圧に覆われている数日間は天候が安定するが、高気圧の勢力圏外に入った

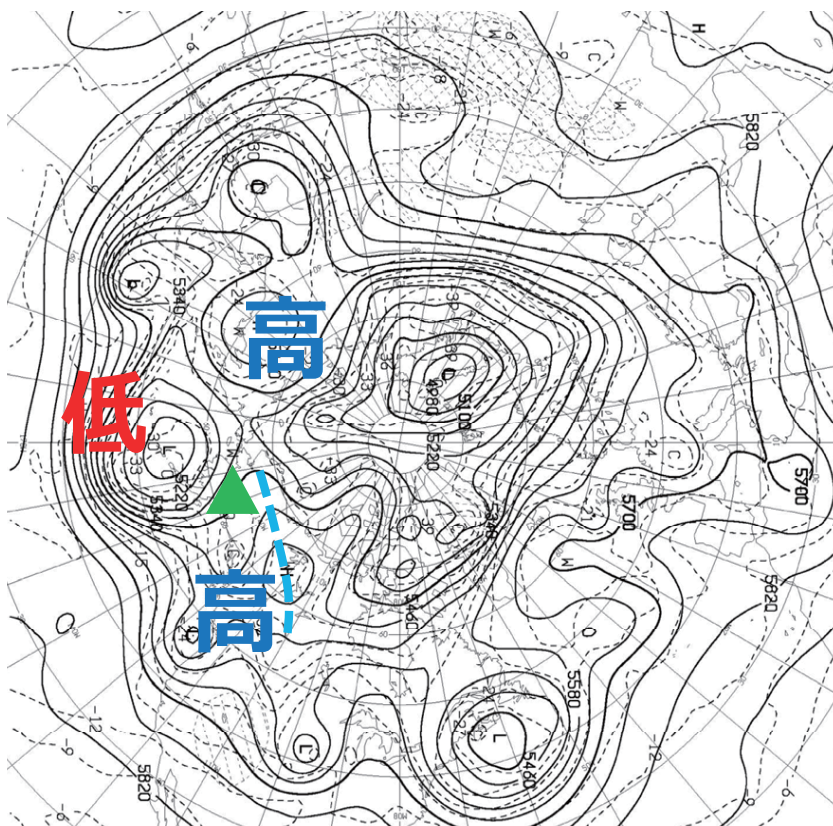


図2 2022年4月30日アラスカ時間午前3時 500hPa面高度・気温解析図

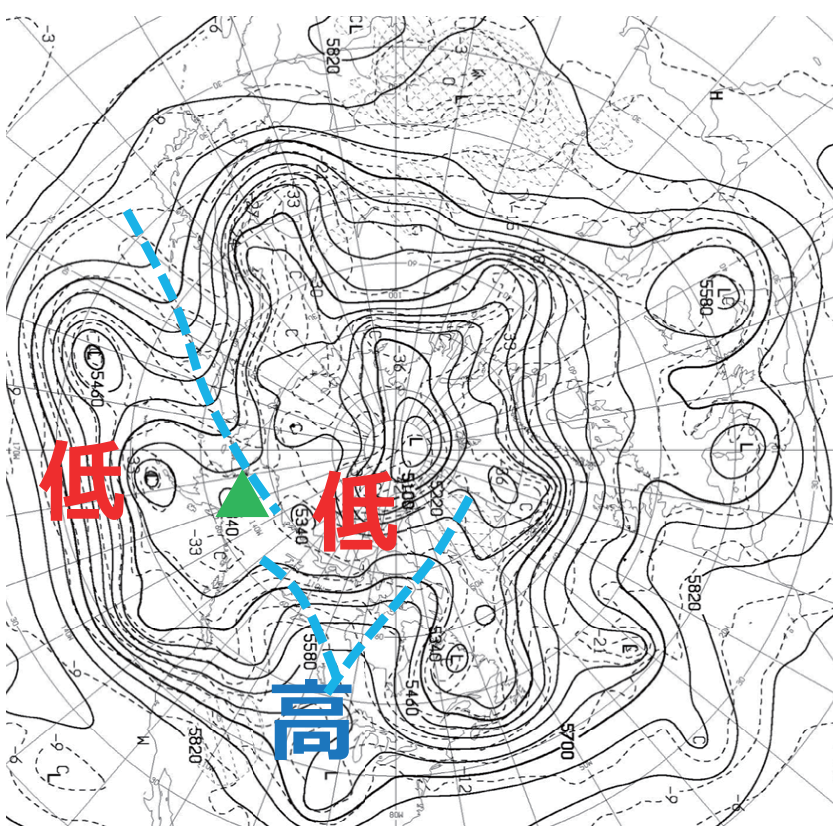


図3 2022年5月6日アラスカ時間午前3時 500hPa面高度・気温解析図

り、低気圧がアラスカ付近で停滞すると悪天が続くことになる。好天周期をうまく捕らえることが重要である。ネットなどで見られる天気予報もあるが、精度が低いものもあるので、下記のサイトで得られる予想天気図から好天のチャンスを見極めるのが良いだろう。

Tropical Tidbits

世界各地の地上、高層天気図が見られるサイト。欧米や日本など複数の数値予報モデルが確認できる。

https://www.tropicaltidbits.com/analysis/models/?model=gfs®ion=ak&pkg=mslp_pcpn_frzn&runtime=2022121000&fh=6

Windy

日本の気象庁のモデルはないので、日本周辺の降水、雲などの精度はそれほど高くないが、ヨーロッパやアメリカのモデルでアラスカの気圧配置や降水、雲の予想などを確認するのに良い。

<https://www.windy.com/subscription?36.067,138.073,5,i:pressure>

以上、文責 猪熊

図：気象庁提供のものを猪熊が作図

写真：吉田一貴、西田由宇、鈴木雄大